

アーバンデザインの展開における まちづくり実践学習プログラムの可能性 -アーバンデザインスクールの取組みを事例に-

片岡 由香¹・羽鳥 剛史²・羽藤 英二³

¹正会員 愛媛大学 防災情報研究センター 助教 (〒790-8577 松山市文京町 3 番)

E-mail: kataoka.yuka.kq@ehime-u.ac.jp

²正会員 愛媛大学大学院 理工学研究科生産環境工学専攻 准教授 (〒790-8577 松山市文京町 3 番)

E-mail: hatori@cee.ehime-u.ac.jp

³正会員 東京大学 工学系研究科 社会基盤学専攻 教授 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)

E-mail: hato@bin.t.u-tokyo.ac.jp

多くの地方都市において、地域の存立を維持していく上で、いかにしてまちづくりの担い手を育成するかが課題となっている。そうした背景の下、愛媛県松山市では、公学民の連携によって地域の課題を解決しながら、若者の地域定着を目指す仕組みとして、平成26年11月よりまちづくり実践学習プログラム「アーバンデザインスクール」の取組みを開始した。本研究では、このスクールの活動内容について報告すると共に、アーバンデザインを展開していく上で、スクールが寄与する点について考察する。

Key Words : urban design, , development of human resources, local collaboration, practical learning

1. はじめに

多くの地方都市において、若者の都市圏への流出が加速化する中、地域の存立を維持していく上で、いかにしてまちづくりを担う人材を育成し、若者を地域に定着させていくかが喫緊の課題となっている。

愛媛県松山市では、公民学の連携によって地域の課題を解決しながら、まちづくりの担い手育成の仕組みとして、平成26年11月より、まちづくり実践学習プログラム「アーバンデザインスクール」(以下、スクール)の取組みを開始した。本スクールは、後述の公民学の連携をコーディネートしつつ、公共空間デザインに取り組んでいる松山アーバンデザインセンター(以下、UDCM)が主催しているものである。

本稿では、UDCMのようなアーバンデザイン(行政による規制誘導や空間計画、住民や地域主体の社会活動を運動させながら都市のための空間デザインを行うこと)を進める組織が、まちづくり実践学習プログラムを実施することが、どのような効果や可能性を有しているのかについて明らかにすることを目的とする。

このような地域での人材育成に関する実践活動としては、BankART¹⁾が主催するBankARTスクール(横浜市)

や、柏の葉アーバンデザインセンター²⁾が主催しているまちづくりスクール(千葉県)など多岐に亘る。また、既往研究としては、地域の計画づくりの中で、参加者を対象にした人材育成に取り組む研究³⁾や、地域再生や公共政策を担う人材の育成に向けて、プログラムの開発を大学が実践的に遂行するもの⁴⁾など、多分野による研究報告が確認できる。しかしながら、本研究のように、アーバンデザインの取組みと人材育成のプログラムの関連に着目した実践的研究はこれまでに見られない。

2. まちづくり実践学習プログラムの運営

(1) 運営主体について

松山市では、人口減少・超高齢化、モータリゼーション等に伴う中心市街地の空洞化や賑わいの衰退、歴史や文化を活かした持続可能都市を目指すべく、平成 26 年 4 月に公民学連携のまちづくり推進組織として UDCM を発足し、同年 11 月に活動拠点をオープンさせた。先述のアーバンデザインスクールは、この UDCM が母体となっており、松山市内の 4 大学(愛媛大学・松山大学・聖カタリナ大学・松山東雲女子大学)の教員が運営

委員会を組織し、活動を進めている。

なお、UDCM の設立経緯、組織体制や活動内容については、前報⁹⁾の通りであり、松山市の中心市街地に活動拠点（民間商業ビル1階部分と、その向かいに整備したポケットパーク）を設置し、松山市内の空間計画や景観整備などの空間デザインマネジメントについて行政との協働により遂行している。

(2) アーバンデザインスクールのコンセプト

本スクールは、「学生から一般市民まで、まちへの思いを持った幅広い世代が集い、参加者自らが柔軟な発想と方法でまちづくりを企画・実践する中で、まちづくりの進め方を学んでいく市民参加型・体験型の学習プログラム」である。参加者は、まちとの関わりや多様な人々との交流を深めつつ、まちづくりの企画から、ワークショップや市民講座の運営を経て、まちづくり活動の実践に至るまで、まちづくりに関わる一連のプロセスを体験し、その中で自ら成長していくと共に、まちの歴史や文化に根ざした、松山市ならではの魅力的なまちづくり活動に結実させていくことを目指している。

現在まで 30 名程度の生徒が隔週で集まり、松山市内のまちづくりの課題や楽しみ方について各自が発見をし、それらから各自でテーマを導き、大学関係者や自治体、地元企業との連携の下、松山市におけるまちづくり活動に取り組んでいる。

(3) スクールの運営体制

本スクールの運営については、スクール開始の3ヶ月前より、松山市内の4大学（愛媛大学、松山大学、聖カタリナ大学、松山東雲女子大学）の教員によってアーバンデザインスクール発足準備委員会を設置し、まちづくりの担い手育成のためのスクールの開講に向けて準備を行った。その後、同準備委員会を運営委員会と改め、まちづくりに係る相互学習・課題解決力向上プログラムを検討し、実施に向けての協力体制を整えた。生徒の募集については、学生だけでなく、年齢問わず社会人も参加可能とした。その結果、30名（最終的には25名が活動を継続した）の応募があり、その内5名は社会人であった。

また、スクールの実施場所（毎回生徒が集まる場所）をUDCMとしていたこともあり、周辺の商店主や自治会長、企業およびNPOの代表などに、スクールアドバイザーとしての協力を依頼した（図1）。

本スクールのプログラムでは、スクール生らによる自主的な企画立案を促しているため、生徒らの企画内容の進展によって、適宜関係者に協力を依頼し、関係構築を進めた。なお、スクールの実施母体であるUDCMが既に松山市や地元企業・NPOとのまちづくり連携組織であるため、それらのネットワークを活かすことも可能となる

運営の仕組となっている。

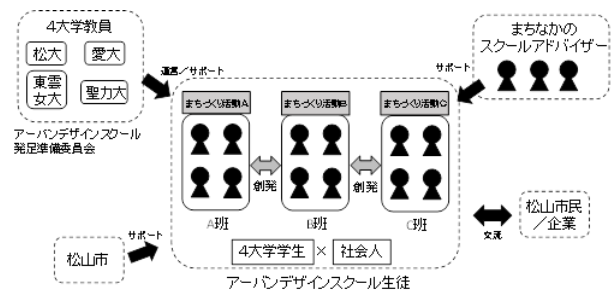


図1 スクールの運営体制

3. まちづくり実践学習プログラムの実施内容

(1) プログラムの内容

スクールのプログラムについては、以下の1)と2)及び図の通りであり、学生の学年の切り替わり時期を考慮し、第1期、第2期の2部構成での実施を計画した（図2）。

a) プログラム第1期（第1～10回）

スクールの生徒たちは、運営委員によるレクチャーやワークショップの実施を通じて、まちづくりの基本的な進め方について理解すると共に、松山市のまちの課題を発見し、①ワークショップ、②まちづくり講座、③まちづくりプロジェクト実践を基本とした「プログラム企画書」（自分達でどのようなことが出来るのか）を作成した。

b) プログラム第2期（第11～20回）

生徒らが作成した「プログラム企画書」を基にして、実際に地域住民やNPO団体、地元企業と連携し、協力を得て、企画書のまちづくり活動について実践へと結びつけていくことを計画した。

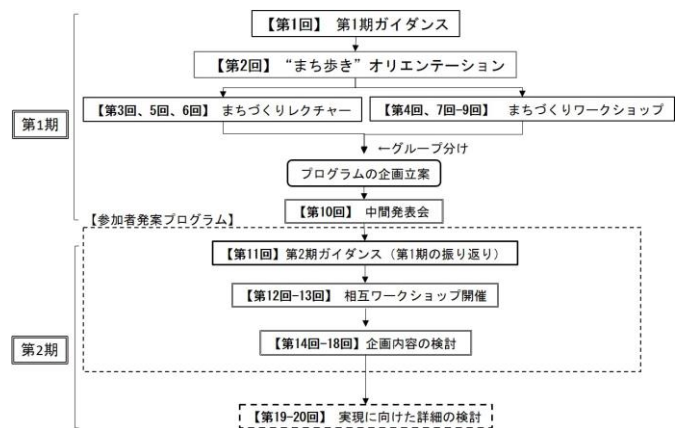


図2 スクールのプログラムの流れ

(2) スクール生による企画案

スクール生は、まち歩きやワークショップを繰り返し、

自分達の関心のある地域とその地域で取り組みたい課題解決（地域の魅力向上）テーマについて発表し合い、グループ形成を行った。その後、各グループでまちづくりを進めるための企画書を作成し、平成27年4月11日には市民・行政職員参加のもと中間発表会を開催し、企画内容の公開プレゼンテーションを実施した。なお、スクール生による企画テーマについては以下の通りである。

表1 スクール生による企画案（第1期生）

	企画案タイトル	チームの構成員	人数
1)	これ、大街道総なめしてるってよ。 ～ぼっち・つれてってマップ～	愛媛大学教育学部（3年）	4名
2)	愛媛の「食」	松山大学経済学部（1, 2, 4年）	3名
3)	椿のおもてなしプロジェクト	愛媛大学工学部（3, 4年 各2名）、社会人3名	7名
4)	道後のにぎわいをいつまでも歩いて見つけるまちの魅力	松山大学経営学部 2, 3年、愛媛大学工学部 3年、社会人1名	4名
5)	走れ!!こども屋台電車	愛媛大学工学部3年	5名
6)	鉄道は浪漫だ!! ～走れ!オリジナル鉄道部～	愛媛大学工学部3年	1名
7)	こども×大学生	愛媛大学工学部3年	2名
8)	次世代へ繋ぐ、ボクらの軌跡へアーバンデザインスクール活動記録～	松山大学経営学部3年	1名

表1の1)の企画案は、商店街とその周辺を対象に、1人でも入りやすい店、友人・恋人に連れて行ってもらいたい店を取り上げたマップ制作のプロジェクトである。地域との連携としては、地元の商店街などが出資して形成されたまち会社代表にプレゼンテーションを実施し、マップ制作後の配布・設置場所などの相談を行っている。

表1の2)の企画案は、愛媛の地域で親しまれている店舗を新聞やラジオで紹介する企画である。

表1の3)の企画案は、道後温泉地区に点在する椿の花に着目し、椿の香りで地域のブランディングを図ろうとする企画である。道後温泉の旅館で販売されている椿オイルを活用した香り付き絵馬の制作やイベント実施のプロジェクトである。道後温泉の旅館組合などにプレゼンテーションし、イベント実施に向けて協力を得た。

表1の4)の企画案は、道後温泉地区を対象に、温泉以外の魅力を発掘することが目的で、地域内に点在する湯玉のマークを探しながら、参加者に地区内を自由に歩いてもらい、参加者が発見した事や物について情報を集積し、マップとして仕上げるという企画である。行政担当者と地元協議会に相談しつつ企画実現まで詳細を詰めている（平成27年7月時点）。

表1の5)の企画案は、松山市中心部を走行している路面電車に着目し、子供を対象としたイベントを企画する

もので、6)の企画案は、路面電車の軌道に、全国からオリジナル車両を集め、コンテストを開催するという企画である。両企画とも地元鉄道会社に対してプレゼンテーションを実施し、アドバイスをいただいた。

表1の7)の企画案は、子供の外遊びの減少という遊び環境の変化に着目し、異世代の交流としての大学生と子供による外遊びを企画するというものであり、UDCMの活動拠点（ポケットパーク）にて土嚢を活用した子供用プールを子供たちと一緒に手作りするというイベントを企画した。企画実現に向けては、このポケットパークの整備を担当した地元業者による技術面の協力を得ている。

表1の8)の企画案は、本スクールの第2期生募集に向けて、各企画案の説明や進捗状況、メンバー紹介などをまとめてHPに掲載するという企画で、地元のウェブデザイナーのアドバイスを受けながら制作活動に繋がった。

また、これらのスクールでの活動の情報発信として、地元FM放送局によるラジオ番組を活用している。本ラジオ番組は、UDCMとFM放送局が連携して、週に1度15分間放送しており、この番組の中で、スクール生による企画案の説明や、予定しているイベントの案内などを題材に収録している。このような情報発信については、企画を告知できるという効果だけでなく、学生らのモチベーションの維持にも繋がっているものと考えられる。

4. UDCMとの活動とスクールの連携

先述の通り UDCM は、松山市内の空間計画や景観整備などの空間デザインマネジメントに関する事業を行政との協働により進めている。それらの事業とスクールとの関わりについて以下の通り整理する。

(1) 松山市の計画策定業務との連携（市民からのアプローチによるもの）

UDCMでは、平成26年度に松山市から「道後温泉活性化基本計画」の計画策定業務を受託し、コンサルタントの協力を得て業務を遂行した。計画内容については、地元の懇談会や市の審議会において承認を図ったが、基本コンセプトや道後地区内の各エリアの方向付けのたたき台を作成するにあたり、都市設計提案競技「U-30 都市計画・都市設計提案競技 風景づくり夏の学校2014」を実施した。審査後、入賞したチームによるアイデア提案については、地元でのプレゼンテーション、ワークショップの実施、展示会などによって市民向けに公表の場を設けた。その公表の場において入賞者のアイデア（道後地区の源泉を巡るまち歩きイベント）に関心を持った地元まちづくり協議会のメンバーより、実現に向けての協力の要請があった。本件を、UDCMで主催しているアーバ

ンデザインスクールの生徒に紹介し、企画実現に向けて関心のある生徒を募った。実現への企画立案やイベント実施までの準備、当日のスタッフとしての協力に至るまでをスクールの生徒らが行い、地元まちづくり協議会のメンバーが適宜学生らへのアドバイスやイベント協賛企業等の調整を行った。

(2) 松山市の計画策定業務との連携（スクール生からのアプローチによるもの）

UDCMは、(1)の通り、計画策定業務を遂行する過程で、地元関係者による地区の今後のまちづくりについての意見を聞く機会を度々得ていた。その中で、道後地区には椿の花が点在し、花を楽しみながら地区内を散策できるようなマップを発行している事や、椿オイルを絞る体験型施設の構想などを聞く機会があった。スクールの生徒らの中に道後地区を対象にブランディングに向けての企画を検討しているチームがあり、それらの地元関係者による情報を生徒らと共有した。生徒らは3 (2) の表1の3) の企画を立案後、地元関係者らに提案し、協議を重ねた結果、協力（イベント実施に向けての資金や会場の提供、広報など）を得て、実現へと結実させた。

5. おわりに

本稿で取り上げた実践学習プログラムについては、参加者自らによる街への関心から、まちづくりを企画・実践し、まちづくりの進め方を学んでいく体験型のプログラムである。参加者は、企画の規模は様々ではあるものの、限られた期間の中で、地域との関わりを持ちながら各まちづくり活動へと結実させていった。このような取り組みを、UDCMのように行政や地域団体と連携しながらアーバンデザインを進める組織が主催することは、スクール生への地域や行政の動き等の情報共有、及び、まちづくりへの関心とのマッチングをさせやすいと考えられる。また、地域にとっては生徒らの企画によって新しい活動展開の契機になる可能性を有しており、行政側からみれば、地域主体の活動の促進にも繋がると言える。

また、UDCMから見れば、ある地域（空間）における関係主体間のコーディネートや、UDCM自体の地域との関係構築にも寄与しているものと考えられる（図2）。

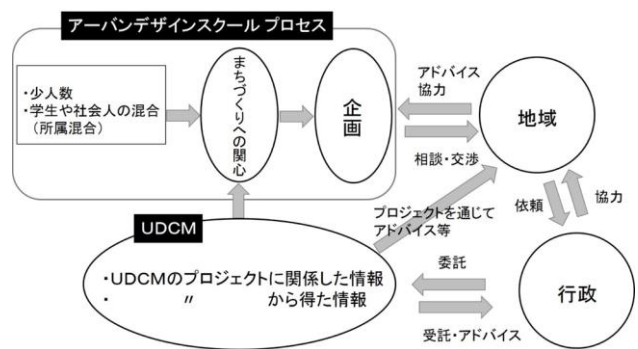


図2 UDCMとスクールと地域団体との関係図

今後、分析を重ね、効果的なプログラムやコーディネートのあり方やについて考察を深めたい。

謝辞：本稿のプログラム実施にあたっては、松山大学の河内俊樹准教授、聖カタリナ大学の徳田剛准教授、松山東雲女子大学の直井玲子講師にご協力をいただきました。記して謝意を表します。また、本稿は平成27年度COC地域志向教育研究経費の補助を受けて作成しました。

参考文献

- 1) 池田修：なぜ BankART が生まれたのか？, 新都市, Vol.65, No.3, pp.76-81, 2011
- 2) 前田英寿：「アーバンデザインセンターに関する経験的考察-柏の葉アーバンデザインセンターの3年-」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.79, No.655, pp.2203-2212, 日本建築学会, 2008.
- 3) 大藤文夫：地域協働と担い手育成-呉市 S 地区における地区まちづくり計画策定を事例に-, 社会情報学研究, Vol.15, pp.1-11, 2009.
- 4) 谷口博文：地域の公共政策を担う人材育成プログラムの研究：都市政策研究 (12), 福岡アジア都市研究所, pp. 45-60, 2011.
- 5) 三輪律江, 田中稲子, 高見沢実, 田村明弘：都市・地域再生を目指した人材育成に関する考察-横浜国立大学「地域交流科目」による学生参画型実践教育プログラムを通して-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.627-630, 2008.
- 6) 片岡由香, 新階寛泰, 松本啓治, 羽鳥剛史, 羽藤英二：松山アーバンデザインセンターの設立とその役割, 土木計画学研究・講演集 No.51, CD-Rom, 福岡, 2015年6月.

(2015.?? 受付)

FEASIBILITY OF DEVELOPING A PROGRAM FOR LEARNING THE PRACTICE OF URBAN DEVELOPMENT AS AN ACTIVITY OF THE URBAN DESIGN -A case study of Urban Design School in Matsuyama City-

Yuka KATAOKA, Tsuyoshi HATORI and Eiji HATO